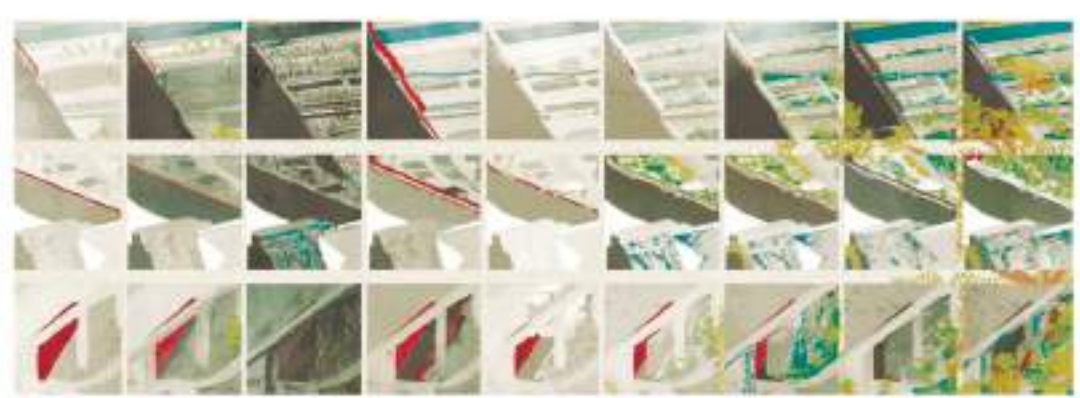


集 落 の 消 滅、延 命。

— 富 山 県 旧 細 入 村 を 対 象 と し た —
時 間 軸 の 建 築 的 プ ロ セ ス



Q. なぜ、集落が消滅するのか？

私が見るその土地の世界は、歴史の積み重ねで成り立つ。

『集落の消滅、延命。』は、筆者が消滅へと向かう集落を見たときに感じた圧倒的な悲壮感と非現実性を基点に始まった建築的プロジェクトである。一般的に人口減少、高齢化、地場産業の衰退などが、土地が消滅へと向かう原因とされているが、どれも消滅へと向かう地域の歴史が描く必然的な現象にすぎず根源的な問題ではないと筆者は考える。

本設計では、富山県富山市に属し、今後50年で消滅へと向かうとされている【旧細入村限界集落群】の9集落に足を運び、実測図の作成やマッピングによる現状のアーカイブから、集落全域の調査/分析を行うことで、集落が消滅へと向かう——真理——を追及し、建築的解決を目指した。それは、富山県や本集落群の深層心理における「自然に対する恐れ」(1-1)によって、人工物が自然からできるだけ乖離する状態を成すものとして現れるという仮説に対して調査と検証を繰り返し論じ、『集落の延命』の建築的手立てを考案するということである。



1 — BACKGROUND 筆者の前提思想

消 滅、富 山、集 落、九 相 図、延 命。
消 滅 へ と 向 か う 限 界 集 落 に 建 築 的 延 命 処 置 を 施 す。

1-1 地方消滅論

町内の中学生が私にこう言いました。「町長さん、この町がなくなっちゃうと言うけれど、私たちはどうすればいいんですか。親にはこんなところに居てもしょうがないよと言われました」と。「自治体が消滅する」という言葉がひとり歩きしている。この責任をいったい誰がとるんですか
※坂本誠：「人口減少社会」の民

—他者とムラの齟齬—

地方消滅のいわれは、元岩手県知事、元総務大臣の増田寛也氏を中心として作成された「増田レポート」である。「中央公論」の特集「壊死する地方都市」の中の第1レポートで最初に公表された。その翌年の日本創生会議・人口減少問題検討分科会による「成長を続ける21世紀のために『ストップ少子化・地方元気戦略』」が世間で大きな注目を浴びた。消滅に対する他者の興味と集落の人々との齟齬。本設計ではこの状況に対して、**建築的操作とその表現で他者に「集落の延命可能性」を認知させたいと考える。**

1-2 富山県について

私の故郷である富山県は、本州の中央北部に位置し、東は新潟県と長野県、南は岐阜県、西は石川県に隣接している。北は富山湾に面しており、その他の三方は、立山連峰等の急峻な山岳に囲まれ、この山々を水源に常願寺川、庄川、神通川等の河川が富山平野を流れている。これらの河川は、世界的にも有河川縦断概略図数の急流河川であり、これまでも数々の水害を引き起こした。そもそも富山県は、廃藩置県後の明治9年に石川県に編入しが、道路改修を主に考える石川側と、治水に重点を置く富山側とで、県予算の分配をめぐり対立したことから、明治16年に石川県から分県し、現在の富山県が誕生した。このように、富山県の歴史は、「水との闘い」で生まれるとともに、**土木構造物が肥大化し、『自然から大きく距離をとる生活を形成する文化から成り立つ』**といえる。筆者が幼い頃、水害に対する危機意識を刷り込まれ、小学4年生の自由研究で、堤防を自作し、段ボールで地形を、ビー玉で水流を現したことを今でも覚えている。

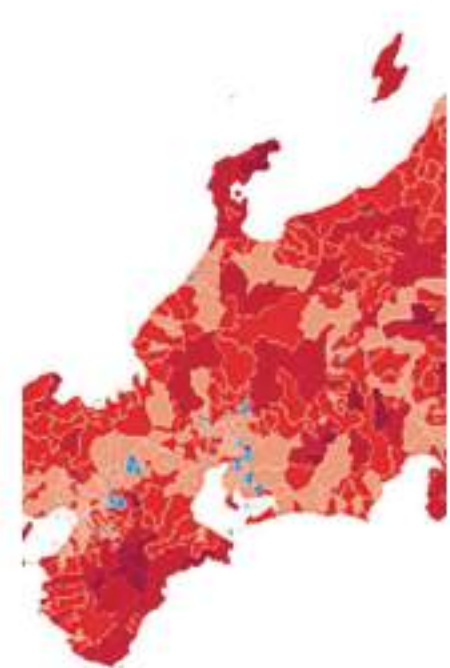
—自然と大きく距離を測る文化—

1-3 ムラのいのち

ムラのいのちがなくなるとは。そこに住む人々は、畑を耕し、山水で洗濯をしたり、森で遊んだり、ムラと多くのかかわりを持ちながら生活を営んできた。永遠だと感じられたのは、共同体が「いのち」の存在に関わるすべてのことを内包していたからに他ならない。自然と人間の関係のなかに「いのち」が存在している。人と人の関係が「いのち」を存在させている。過去や未来との関係が「いのち」のありかを教えている。—だからその内部にいる人々は、ここに永遠の営みがあると感じ、その永続性が太古の昔から永遠の未来にまでつづいていくように感じられた。永続性とは、共同体に対する永遠の信頼があるとき感じられるものである。
※内山節：いのちの場所

—ランドスケープに介在するいのち—

ムラの人々にとってムラのランドスケープがなくなるということは、そこで生活していた人々の営み、存在それ自体の喪失であるといえる。



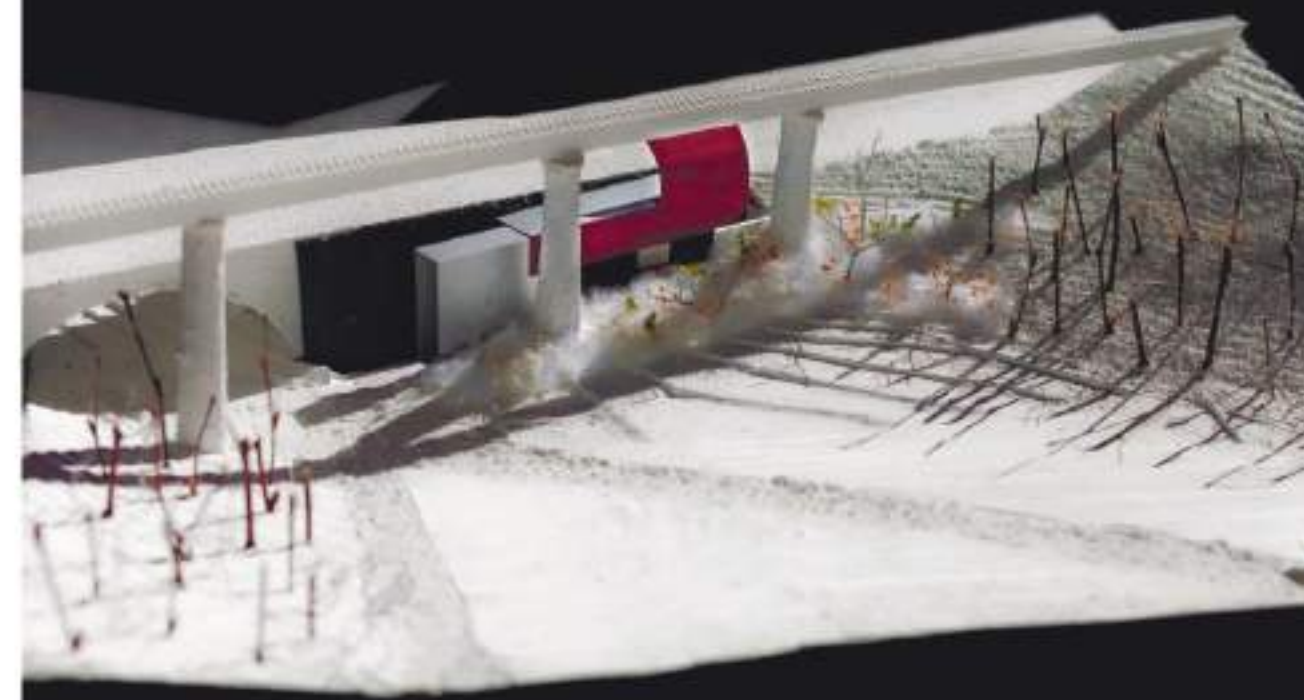
消 滅 へ と 向 か う 限 界 集 落 群 の 延 命 装 置 と し て の 建 築



倍 谷



岩 稻



庵 谷

2 - SITE 調査対象敷地

2-1 富山県旧細入村限界集落群

50年後に消滅に向かえる9つの集落群

旧細入村は、蛇行する川と背後の山々に隔てられ、点在する集落群である。東西4km、南北23km、面積約40km²で山地が大部分を占め、神通川によって形成されたせまい数段の段丘面上を形成している。段丘面に形成された各集落を国道41号線とJR高山線が接続している。

歴史上から、以下に示す4つの境界から現存する9つの集落を選定し、詳しい調査を行った。

【境界】

(1). 旧富山市との境界

2005年に市町村合併で、大沢野町、大山町、八尾町、婦中町、山田村、細入村が富山市に含まれた。よって、調査敷地は旧細入村に含まれる集落とした。

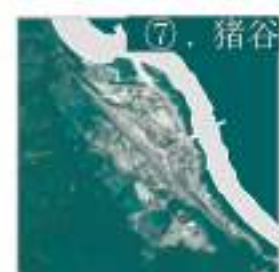
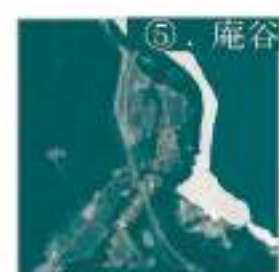
(2). 神通川による東西の境界

1871年の廃藩置県まで、神通川の中央を境界として西が富山藩、東が加賀藩と決められていた。よって、調査敷地は神通川の西側に点在する集落とした。

(3). 岐阜県との県境としての境界

1876年に美濃と飛騨の合併で現代の岐阜県の形へとなる際に、富山県と岐阜県の県境が立ち現れた。よって、調査敷地は富山側に位置する集落とした。

(4). 集落背後に存在する山との境界
西には中位の高度を有する山地が連なる。曖昧にも集落の境界と定めた。

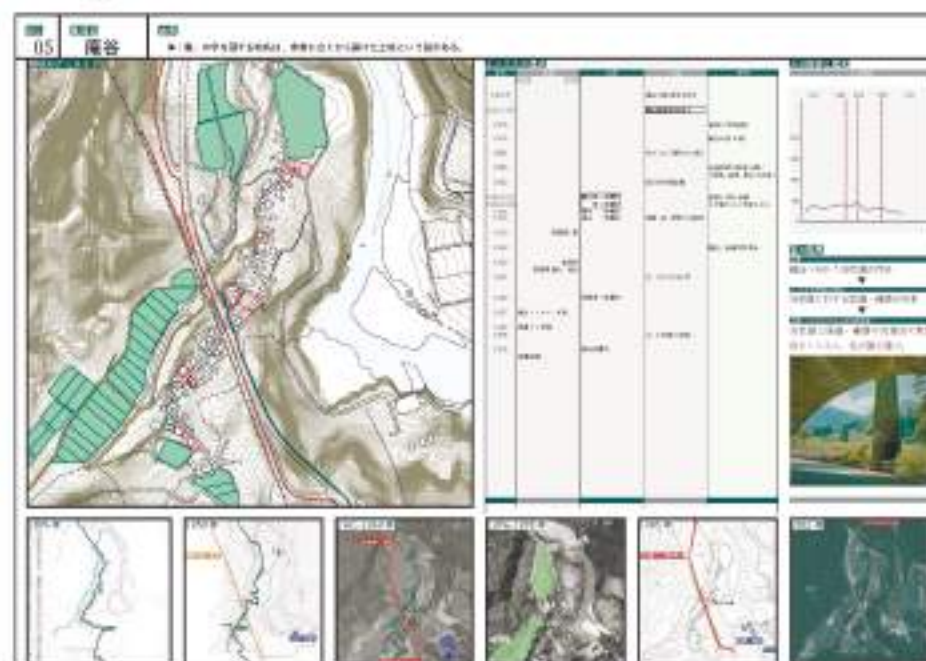


3 - SURVEY 限界集落群調査

3-1 限界集落群全域の調査とマッピングデータシート

9つの限界集落群を巡り、集落が消滅へと向かう根源的原因を探る

3-① 【消滅後も集落全域に遺り続ける土木構造物調査】



各集落のインフラの変遷と構造物のマッピングを行い、各集落が近代土木構造物によって成立する集落であることを明らかにした。

3-② 【ランドスケープインフラによる各集落の形成プロセス】

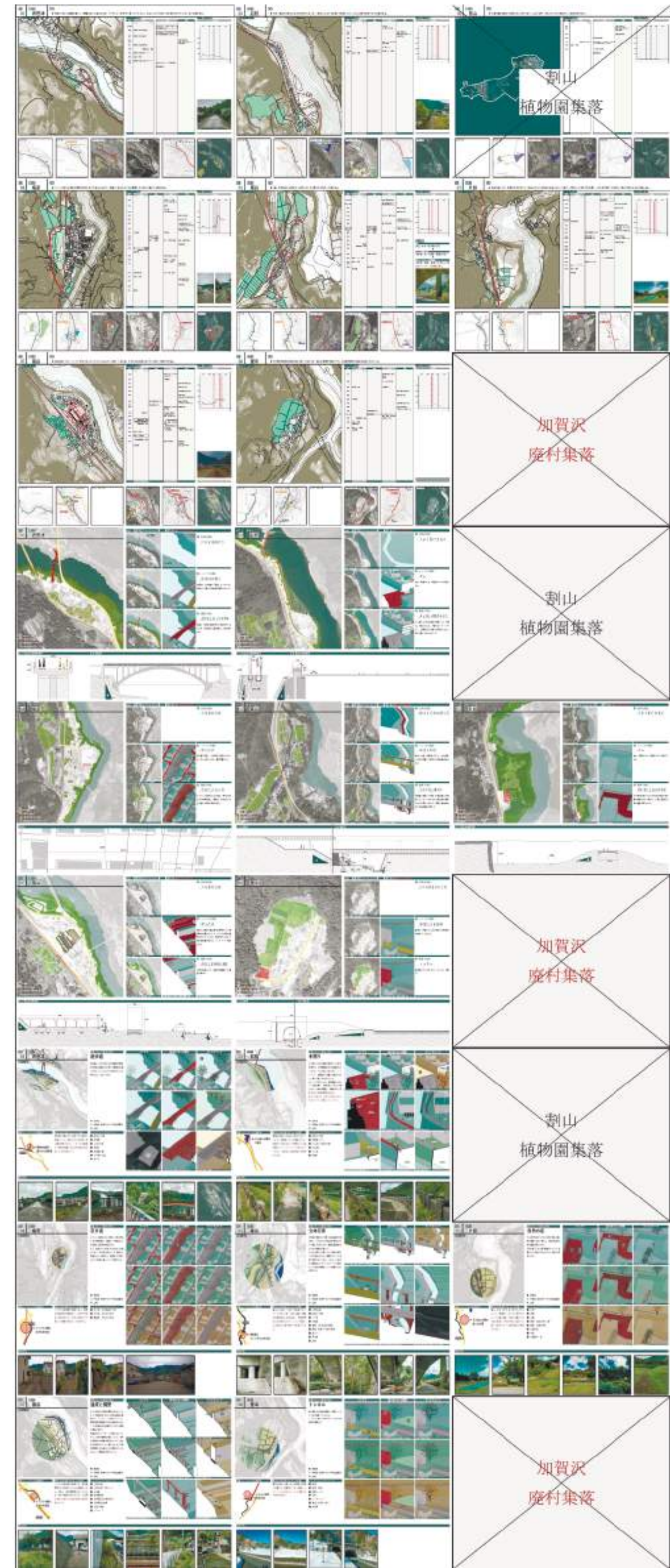


各集落はランドスケープインフラの特徴で土地が形成し、それらの歪みに各集落を特徴づける物質が存在することを明らかとした。そしてデータシート3において、各集落のそれらを『集落の物質』と名付け、寸法と状況調査を行いまとめる。

3-③ 【ランドスケープインフラの歪みの現状】



No.05 庵谷の集落の物質「立体交差」は冬は雪で通行止め、夏は雑草の増殖と虫が飛び交う退廃地域となっている。集落におけるこのような隔たりは、ランドスケープインフラの歪み『土地の貧困化』によって生じることが明らかとなり、集落が消滅へと向かう根源的原因を有していると考えた。



1640

2000

2025

2050

2075

2xxx

4-1 旧細入村植物園化計画

溪流－平坦－傾斜地の希少植生を
9つの集落群で保存していく計画

旧細入村の自然環境は、日本の太平洋側、暖温帯の北部から日本海側、冷温帯の南部に渡り、日本で有数の植生が希少植物が交わる地域である。蛇行する川と背後の山で隔てられる各集落は、山地－平坦地－溪流地がコンパクトにまとまっていることから、より多くの種類の植生が存在する稀な地域である。また、旧細入村は、太平洋側－日本海側の希少な植生が入り混じる地域である。よって、全国の中でも有数の植生的特徴がある地域であることがわかった。

実際に、多くの研究者が今でも細入村の動植物についての生態研究をおこなっていることから、『集落全体で植生を守っていくことが必要不可欠である。』

設計(1). インフラの建築化 【現在－】

集落消滅の根源を建築化する



集落が消滅する根源的原因とした『土地の貧困化』は集落の土木構造物（専ら富山が自然に対して距離を測る文化を有する（前提② 富山県について））が要因である。本設計では、その土木構造物を建築化することで、各集落の溪流－平坦－傾斜地の隔てを繋ぐものとして編集し、**集落の延命装置**として機能させることを目指す。

土地の貧困化 【現在－】

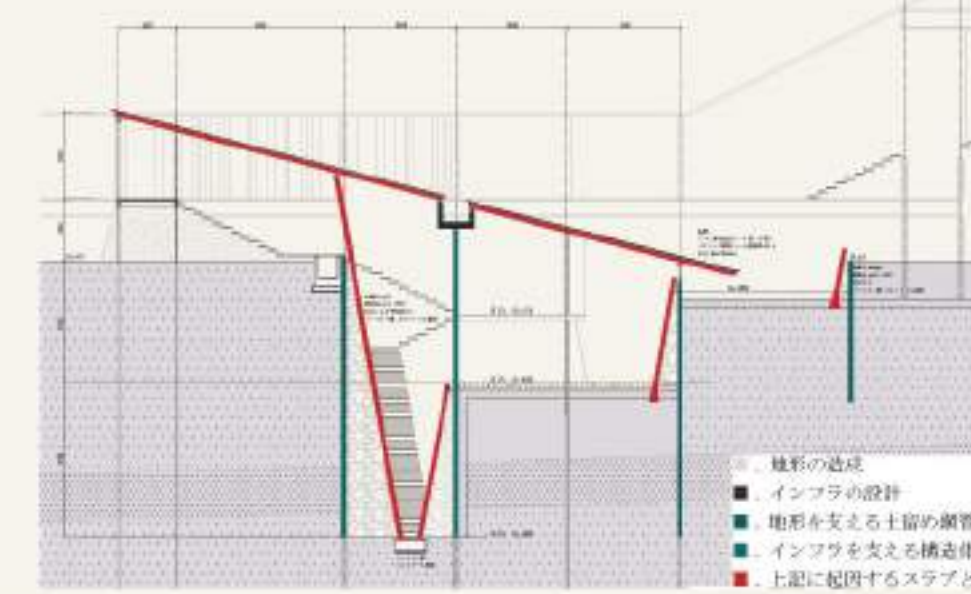
①. 土地改善が必須の地



土地の貧困化

設計(2). 建築の解体と地形の再利用 【－ 2075】

地形に対する最小限の操作で建築が成り立つ



多年草と集落希少植生による土壌の変遷

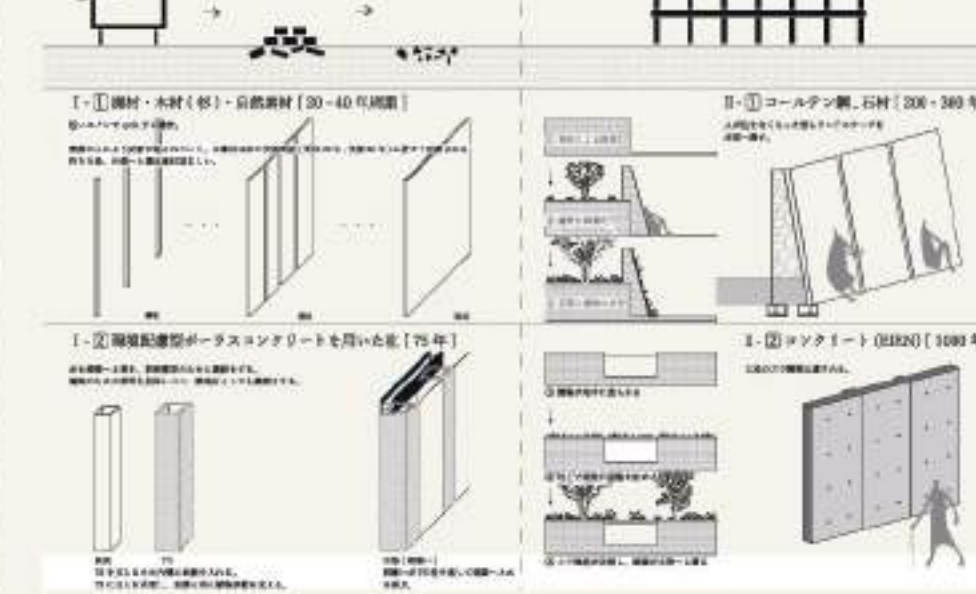
②. 多年草と集落の希少植生によるランドスケープ計画



移り変わる多年草と
集落の希少植生の計画

設計(3). 建築の退廃と植物の変遷による集落のビジョン 【2075－】

旧細入村植物園化計画



旧細入村限界集落群は溪流－平坦－傾斜地の三属性の希少植生が入り混じる日本で数々の地域である。この三属性を各集落に割り当て、旧細入村限界集落群全体で保存をしていくための建築－ランドスケープの

時間軸とその**プロセス**を設計した。

③. 人の手が離れると、集落既存の希少植生の生息場所へと徐々に推移



2075 年以降、旧細入村限界集落群を
9つの植物園としてコンバージョンする計画

集落の地形

集落の希少な植生分布

集落のインフラによる接続

【特異的な地形による希少な植生分布】

舞台は富山県旧細入村集落群。蛇行する川と背後の山に囲まれた特異地形から溪流－平坦－傾斜地がコンパクトであること、太平洋－日本海側の植生合流地域であることから希少な植生分布が見られる。



集落のインフラ

地形とインフラの歪

【インフラの接続】

各集落は国道 41 号線と JR 高山線で接続がされており岐阜県と富山県を繋ぐ幹線道路としての役割を担う。

蛇行する川と背後の山で囲まれ点在する各集落はその特異的な地形を貫くように鉄道と国道で接続される



集落の繋がり

人口推移より 2075 年に集落消滅

【9の集落消滅】

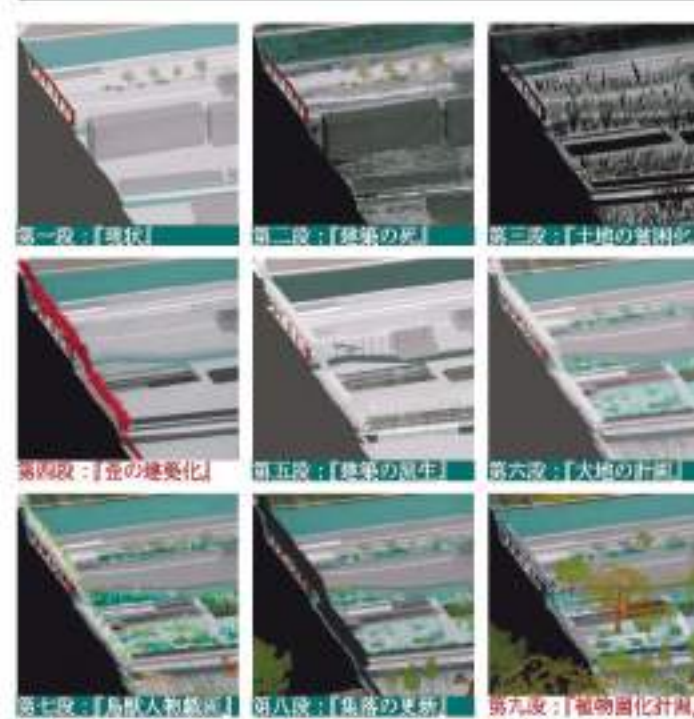
集落の消滅過程とその後をデザインする。



①. 歪の空間化

調査から、現状の集落は『土地の貧困化』により加速度的に消滅消滅へと向かっていると結論付けた。本計画では集落の特異的な地形とインフラによって生まれた**【歪を建築化】**することで土地の貧困化による地域の隔たりを繋ぎとめ、集落の未来を描く。

②. 土地の貧困化に対する建築的プロセス



集落の消滅－延命を九相で表現する。『歪の建築化』による集落の繋がり2075年の人口減少に伴い生まれる大地の現しを用いた『建築の派生』により建築と大地を一体に計画することで、集落のランドスケープ的な計画方法を示唆する。

集落のランドスケープをつくる機能

集落の機能を保存する建築

新たな集落の計画

繁栄した植物が建築を保存する

【溪流－平坦－傾斜地】3属性の植生を集落全体で保存する計画



③. 旧細入村限界集落群植物園計画

土地の貧困化の解消から 2075 年以降のランドスケープ計画





1 - SITE 猪谷

【溪流地】植生の保存，研究

既存の地形に対して水道橋の軸を延長することで、擁壁による段差を揺らぐように線を引き、植物の居場所を設計した。



- ①. 水道橋（既存土木）の建築化
- ②. 種子保存棟
- ③. 植物栽培棟

『集落の植物をアーカイブ』する建築とランドスケープ



2 - SITE 岩稻

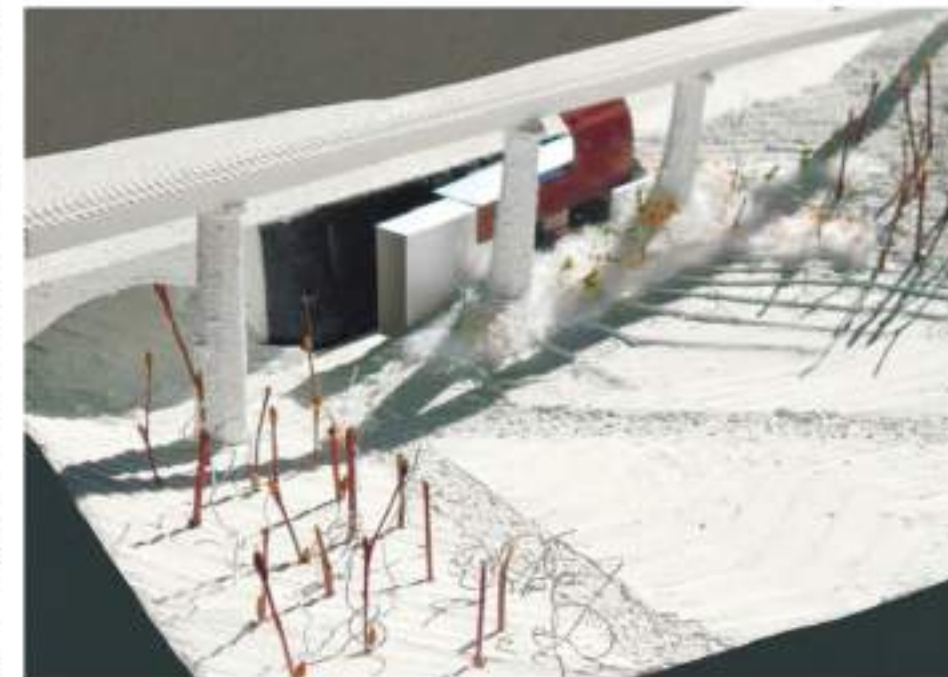
【平坦地】植生の保存，研究

既存のオーバースケール手摺りをさらに拡張して、集落の人々の居場所を設計した。



- ①. 手摺り，用水路（既存土木）の建築化
- ②. 種子保存棟
- ③. 生活廃材工房棟

『集落の生活をアーカイブ』する建築とランドスケープ



3 - SITE 庵谷

【傾斜地】植生の保存，研究

傾斜地に対して、既存土木階段を拡張して、集落の物の居場所を設計した。



- ①. 土木階段（既存土木）の建築化
- ②. 種子保存棟
- ③. 工房棟

『集落の材料をアーカイブ』する建築とランドスケープ

4-2 旧細入村九相図

旧細入村限界集落群の九相図を描くことで、集落の消滅—延命の段階的表現をおこない、土地の未来を今、伝える。

第一段_集落の現状，第二段_集落の退廃，第三段_土地の貧困化，第四段_物質の建築化，第五段_建築の派生，第六段_周辺ランドスケープの計画，第七段_動植物の繁栄，第八段_建築の退廃，植物の推移，第九段_集落の延命

